

清・張自超の『春秋宗朱辨義』について（上）

On Zhang Zichao's Chunqiu zong Zhu bianyi (Distinguishing the
Meaning of the Spring and Autumn Annals following Zhu Xi)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

This paper examines Zhu Xi's interpretation of the Spring and Autumn Annals through a study of Zhang Zichao's Chunqiu zong Zhu bianyi (Distinguishing the Meaning of the Spring and Autumn Annals following Zhu Xi). The study makes it evident that Zhu Xi regarded the Spring and Autumn Annals to be a straightforward record of events and affairs. It furthermore shows that Zhu Xi did not endorse those interpretations which treated each of Confucius' utterances in the Annals to be a subtle judgment of praise or blame.

はじめに

『春秋宗朱辨義』は、清の張自超（字は彝歟。江蘇高淳の人。康熙四十二年〔一七〇三〕癸未科二甲四十九名の進士）によって書かれた。『四庫全書總目提要』には、次のような提要がある。

國朝の張自超撰。自超 字は彝歟。〔江蘇〕高淳の人。康熙癸未（一七〇三年）の進士。未だ仕えずして卒す。〔乾隆〕『江南通志』（卷一百六十三・人物志・儒林傳一・江寧府）之を儒林傳の中に列す①。是の書の大意は朱子の據事直書の旨②に本づき、隱深阻晦の説を爲さず。惟だ經文の前後に就き、參觀し以て其の義を求む。知る可からざる者は則ち之を闕く。篇首の總論二十條は頗る比事屬辭③の旨を得。其の中、「單伯逆王姬」（卷三・一葉～二葉・「〔莊公元年〕夏，單伯逆王姬逆左作送」条）は則ち王氏の説に従いて以て魯の大夫と爲し、⁽¹⁾「秦獲晉侯」（卷五・三十葉・「〔僖公十五年〕

十有一月、壬戌、晉侯及秦伯戰于韓、獲晉侯」(條)に於いては名を書せざる所以の故を辨じ、「宋師敗績」(卷五・四十三葉・「[僖公二十二年] 冬十有一月、己巳朔、宋公及楚人戰于泓、宋師敗績」(條)に於いては公と書せざる所以の故を辨じ、「司馬華孫來盟」(卷六・四十一葉～四十二葉・「[文公十五年] 三月、宋司馬華孫來盟」(條)に於いては『胡傳』の義の名に係らざるの説を辨じ、「盟宋罪趙武之致弱」(卷九・六十三葉～六十四葉・「[襄二十七年] 秋七月辛巳、豹及諸侯之大夫盟于宋」(條)に於いて・「楚公子比、公子棄疾弒立」(卷十・二十六葉・「[昭公十三年] 楚公子棄疾殺公子比」(條)に於いて書法もて『春秋』の微顯の義を見ず、「齊殺高厚」(卷九・四十一葉・「[襄十九年] 齊殺其大夫高厚」(條)に於いては晉を説すに非ず謂い④、「衛人立晉」(卷一・二十二葉～二十三葉・「[隱公四年] 冬十有一月、衛人立晉」(條)の一條は尤も『春秋』の深意を得るが如し。宗朱(朱子を宗とする)を以て名と爲すと雖も、經傳を參求し、務めて心得を求む。實に南宋以來の穿鑿附會⑤の説に非ず⑥。後、方苞『春秋通論』⑦を作るも、多くは材を此の書に取る。近時の『春秋』を解する者、焦袁熹の『春秋闕如編』⑧の外は、此れ亦た其の亞なり⑨(『四庫全書總目提要』卷二十九・經部二十九・春秋類四・「春秋宗朱辨義十二卷」(條)。

①「書前提要」には「未仕而卒、江南通志列之儒林傳中」句はない。

②據事直書:『朱子語類』に「『春秋』の書する所の某人 某事を爲すが如きは、本より魯史の舊文に據りて筆削して成る。今人『春秋』を看れば、必ず某字もて某人を譏ると謂うを要す。此の如ければ、則ち是れ孔子 専ら私意に任せて、妄りに褒貶を爲す。孔子は但だ直書に據りて善惡 自ずから著わす。今、若し必ず此の如く推し説くを要せば、須く是れ魯史の舊文を得て、筆削の異同を參校し、然る後に見る可

✓(1)『春秋大全』(卷七・「[莊公元年] 夏、單伯逆王姬 單音善。後同。「逆」『左傳』作「送」」(條)に「王中子曰」として、次のようにある。

王中子 曰く、禮に天子 其の大夫をして方伯の國を監せしむ。國には三人。魯の大夫に單伯・費伯・夷伯有り。是れ魯に監國の三大夫有るなり。

しと爲す。而れども〔これは〕亦た豈に復た得可けんや。譏（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

③『禮記』經解に「屬辭比事，春秋教也」とあり，鄭玄は「屬とは，猶お合のごときなり。『春秋』は多く諸侯の朝聘・會同を記し，相い接^{まじ}わるの辭，罪辯の事有り」と注する。

④「書前提要」には「於定公八年，從祀先公以爲昭祔成廟定公所祀之高曾祖禰仍是文宣成襄確有所見而」句がある。

⑤『宋史』王安石傳に「晩居金陵，又作『字說』，多穿鑿附會」。

⑥「書前提要」は，「非」を「掃」に作る。

⑦「書前提要」は，「春秋通論」を「春秋經解」に作る。

✓（２）『四庫全書總目提要』は，『春秋闕如編』について次のような提要を書いている。

國朝の焦袁熹（順治十七年〔一六六〇〕～雍正十三年〔一七三五〕）撰。袁熹 字は廣期。金山の人。康熙丙子（一六九六年）の舉人なり。是の編 袁熹の未だ成らざるの書と爲す。僅かに成公の八年に及びて止む。毎卷に袁熹の名印有り。蓋し猶お其の藁本なるがごとし。前に其の孫の鍾璜の跋有り。亦た當時の手跡なり。『穀梁』の常事を發して書せずの例もて，〔宋の〕孫復（字は明復，泰山先生と称される。山西晉州平陽の人。淳化三年〔九九二〕～嘉祐二年〔一〇五七〕）「貶有りて褒無し」と〔敷〕衍するの文より①，後代 承流して，轉た相い摹仿し，務めて刻酷を以て經義と爲す。二百四十二年の中，上は天王に至り，下は列國に至るまで，一人の彈刺を免るるを得るもの無し。遂に游夏をして之を贊して能わざらしむる者・申韓 之を爲して餘り有りて流弊の極まる所は乃ち貶の天道に及ぶ者有り〔割注：呂柟の『春秋說志』に「季孫を書するの意は卒なるが如しは，天道の左を見す所以なり」と謂う〕。『春秋』 是に於いてや亂る。袁熹の是の書 獨り情理の平を酌み，褒貶の準を立て，謹みて大義を持し，煩苛を刊削す……近代の『春秋』を説く者は當に此の書を以て最と爲すべし。編輯 未だ終わらずと雖も，義例已に備われり。經學に於いて深く裨する有りと爲す。其の經說の諸書の門人の雜錄に出る者の比に非ざるなり（『四庫全書總目提要』卷二十九・經部二十九・春秋類四・「春秋闕如編八卷」条：「書前提要」も同じ）。

①宋・王得臣（嘉祐四年〔一〇五九〕の進士）の『塵史』に「泰山の孫復明先生，『春秋』を治めて『尊王發微』を著わし，大いに聖人の微旨を得……故に曰く，『春秋』 褒無し，と。蓋し穀梁氏の所謂ゆる常事は之を書せずと義同じ」（『塵史』卷中・經義）。『穀梁傳』莊公二十三年「夏，公如齊觀社」の傳に「常事は視と曰い，常に非ざるは觀と曰う」とあり，楊士勛の疏に「春秋の例 常事は書せず」。また，『經義考』に黃澤の発言が引いてあり「黃澤 曰く，孫泰山（孫復）謂う，『春秋』は貶有りて褒無し，と。若し此れに據りて經を解すれば，則ち舛謬に勝えず」（『經義考』卷一百七十九・春秋_{十二}・「孫氏復春秋尊王發微」条所引「黃澤曰」）。

⑧「書前提要」は、「其亞」を「善本」に作る。

朱子を宗としているが、經・傳を参照し、自ら理解することを求め、穿鑿附會を行なわない著作であるとする。そして四庫館臣は「近時の春秋を解する者、焦袁熹の『春秋闕如編』の外は、此れ亦た其の亞なり」と述べ、高い評価を下し、四庫全書に著録する。

拙稿は、朱子を宗として『春秋』の諸問題を解説した『春秋宗朱辨義』についての検討を行ないたい。そうすることで專著を残さなかった朱子の『春秋』解釈の一面が理解できるのではないかと考えるからである。

なお拙稿は、乾隆五年嘉平月（陰曆十二月：太陽曆では一七四一年一月十七日から二月十五日にあたる）新鐫の世耕堂刻本を用いる。

（1）張自超について

若いときからの友人であった方苞⁽³⁾（字は靈皐、晩年に望溪と号す。安徽桐城の人。康熙七年〔一六六八〕～乾隆十四年〔一七四九〕）は、張自超について、次のように述べている。

張自超 字は彝歟、[江蘇] 高淳の人。世々蒼溪に居る。少くして孤なり。課耕（耕作を督促する）もて其の母を奉ず。其の族 故より繁ならず、親屬（親族） 凋盡す。高祖より以下、惟だ一身なるのみ。常に自慙（謹んで）して、人の世の歆羨（羨望）する所を視るに、泊如（恬淡として無欲）たり。諸生と爲りて、試は必ず其の曹（学生仲間）に冠たるも、舉場に困しむこと幾ど三十年。[しかし] 未だ嘗て慍色有らず。古文及び詩を治め、得る所皆な驚邁なるも、未だ嘗て名を爭わず。時 五十に近きに於いて、始め

（3）方苞の「四君子傳序」に、

余（方苞） 弱冠にして、先兄の百川（方舟：字は百川。安徽桐城の人。康熙四年〔一六六五〕～康熙四十年〔一七〇一〕。順治十八年〔一六六一〕辛丑科二甲三十四名の進士）に従いて友を求め、……高淳に於いて張彝歟（張自超）を得……（『望溪先生文集』卷八・傳・「四君子傳序」・三葉～四葉）。

とある。

て甲科（進士）に登るも、肯て吏と爲るを試みず。性 明決（事情に通じて決断力がある）、爲さざる所は、衆 能く奪う莫し。爲さんと欲する所は、困しむと雖も以て自ら悔いず（咸豐元年〔一八五一〕戴鈞衡彙刻全集本『望溪先生文集』卷八・傳・「四君子傳 并序」・六葉）。

性格は恬淡として無欲であった。生員となり歳試・科試では、成績優秀だったものの、三十年ちかく進士にはなれなかった。ようやく、五十歳に近づいた康熙四十二年〔一七〇三〕に、二甲四十九名で進士に及第する。

しかし、進士になり、禮部尚書の韓莛の推薦を受けるが、母親の病気を理由に、帰郷する。

其の既に禮部に升るや（科擧は禮部の管轄であり、進士及第直後の登科録の編纂などは禮部が行なう）、宗伯（禮部尚書：康熙三十九年〔一七〇〇〕十一月十八日～康熙四十三年〔一七〇四〕九月二十二日在任）の韓公莛（韓莛：字は元少、又の字は慕廬、諡は文懿。江南長洲の人。明・崇禎十年〔一六七三〕～清・康熙四十三年〔一七〇四〕。康熙十二年〔一六七三〕癸丑科一甲一名〔狀元〕）朝に「某は宜しく上甲（第一甲：狀元・榜眼・探花）に在るべし」と昌言す。〔張〕自超 門に踵^{いた}りて「某 母有り、病みて且つ衰う、上甲に登れば、必ず館職を以て留まらん。公（韓莛） 當に人を愛するに徳を以てすべし」と曰う。試 畢りて歸る。其の母 果たして是の秋を以て歿す。母の疾 篤く、爲めに妾を買いて、側室に入るを命ず。泣きて曰く、兒 方寸 亂る。入室すると雖も、歡合して子姓（子孫）を成す能わず。天 果たして張氏を絶たざれば、兒 何ぞ子無きを患わんや」と。其の後、母の喪を終えること數年、妾 終に孕まず。衆 乃ち其の命を知りて惑わざるを歎ず（『望溪先生文集』卷八・傳・「四君子傳 并序」・六葉～七葉）。

帰郷してからも、地元の災害対策などに奔走した。

高淳は、故より湖堦なり。圩を以て水を外に障^{へだ}て、其の中を耕す。歳 大潦（大洪水）ありて、隄 潰^{つい}ゆ。居人 屋材^{のぞ}を撤きて以て之を塞ぐを議す。

[張] 自超 船の百金に直すもの有りて、「速やかに船を毀ちて板築せん」と曰う。隄 完〔成〕し、大いに年有り。衆 其の直を歸すに、終に受けず。平生 未だ嘗て縣治に入らず。歳 連に祿（妖氣）ありて、死者 相い籍す。〔そこで〕、一日、縣令（知縣）に造り、具さに方略（対策）を陳ぶ。令（知縣） 夙て之を重んじ、爲に飲を設け、盡く邑の富人を召す。富人「張君は吾邑の望なり。醵助する所は、則ち吾儕 焉を視る」と曰う。[張] 自超 遂に二百金を注籍（登録）し、諸もろの富人 相い視て大いに駭き、次第に注籍（登録）す。然れども私料 猝に具うる能わざるなり。越えて數日、[張] 自超 首に納金し、諸もろの富人 大いに屈し、盡く金を出して部署を爲し、邑人を活すこと幾んど半ばなり。[張] 自超 田の二百畝有り。畝ごとに六七金なり。其の半ばを披（売り出す）し、直を索むること三の一。衆 争いて之を購う。故に金を得ること速やかなり。晩歳、家日々落す。毎に菽麥を取りて稊稗（いぬびえとひえ）を雜えて之を食す。或いは之が材を遺るも、終に受けず。郷人 不善有れば、常に其の知るを畏る。年 六十を逾えて、尚お子無し。郷人 毎に聚言し、必ず以て大いに感と爲すこと、凶害の己に迫るが如し（『望溪先生文集』卷八・傳・「四君子傳 并序」・七葉）。

また、方苞は次のような逸話を伝えている。

張君彝歎（張自超）の卒するや、異徴有りと聞く。歳を踰えて、其の邑子の孔君端蒙 至りて〔以下のように〕曰えり。彝歎（張自超） 諸生爲りし時、夢に古廟に入り、宋の少保の岳公（岳飛）に見え與に主客の禮を爲す。手文一簡もて刪定を屬まる。且つ曰く、吾 諡を更めらること久し。而る

（4）方苞の「張彝歎哀辭」に、

彝歎（張自超） 六十を踰えて子無し。卒するに前なるの三月、妾の楊氏 身ごもる有り。衆 皆な曰く、是れ必ず男を生むならん、と……（『望溪先生文集』卷十六・哀辭・「張彝歎哀辭」・九葉）。

とある。これが、劉毓嵩と邢紹中との連名の「春秋宗朱辨義序文」に「遺腹の子」として書かれている張待育のことであろうか。ただ、『春秋宗朱辨義』巻首の参訂者の一覧に「男 待育・待成」とあるので、二人の男子がいたようである。

に世人 多く故の諡を擧ぐ。願わくば先生 之を正せ、と。將に別れんとするに忽ち色を變じ容^{かたち}を易えて曰く、會たま相い桃山に待つ、と。彝歎（張自超） 平生、跡を州郡より出でず。其の成均に貢し、禮部に試みられるも、恆に戸を閉ざして一人にも接せず。進士と成り、應に縣令に除せられんとするに、就かず。既に老い、忽ち徐中丞（徐元夢：字は善長・蝶園。諡は文定。満州正白旗人。?～乾隆六年〔一七四二〕。康熙十二年〔一六七二〕癸丑科三甲四十三名の進士。中丞(浙江巡撫)在任は、康熙五十三年十二月十五日（一七一五年一月二十日）～康熙五十六年一月二十七日（一七一七年三月九日）の請に應じ、杭州の敷文書院に主たり。院中に碑を立つるに、工舊石を以て至る。之を按ずるに、則ち岳公の墓碑なり。彝歎（張自超） 曰く、吾の茲の行は、以有るかな、と。困りて中丞（徐元夢）に告げるに昔の夢を以てし、其の文の缺漫を補いて歸る。中丞（徐元夢） 朝に還り、彝歎（張自超）の學行を薦む。詔 江南省に下り、刻時（即刻） 齎送（送りとどけさせる）す。行きて桃山驛（山東省兗州府）に至り、廟の旁に憩う。心 動き。入て視るに、果たして夢中に見る所なり。從者に語げて曰く、吾れ死するに日無し、と。越えて三日、荏平縣の館驛に至り、衣冠を正して端坐して逝く（咸豐元年〔一八五一〕戴鈞衡彙刻全集本『望溪先生集外文』卷六・紀事・「記張彝歎夢岳忠武事」二十六葉～二十七葉）。

夢で宋・岳飛に出会い、諡について依頼を受け、桃山で待っているといわれた。後、杭州で、岳飛の碑文を修理し、桃山（山東省兗州府）で先の夢との合致を理解し、三日後に荏平（山東省東昌府）で終焉を迎えたというのである。

さらに、方苞は、張自超の八股文について、次のように述べている。

彝歎（張自超）の文 凡そ數變するも、皆な能く事理を闡き、人情を窮め、
其の境 開かざるは無きなり、其の體 備わらざるは無きなり（『望溪先生

- (5) この「張彝歎稿序」に「今年の秋、彝歎（張自超） 郷に擧げられ」とあり、乾隆『江南通志』（卷一百三十三・選舉志・舉人九）によると、張自超は康熙四十一年（一七〇二）壬午科において舉人となっているので、「張彝歎稿序」は、康熙四十一年（一七〇二）に書かれたのであろう。

集外文』卷四・序・「張彝歎稿序」⁽⁵⁾・二十葉)。

方苞が「四君子傳 并序」で、張自超は「常に自慙（謹んで）して、人の世の歆羨（羨望）する所を視るに、泊如（恬淡として無欲）たり」ということと、少し異なるようだが、八股文については、方苞とはかなりはげしく批評しあい、議論が紛糾すると方苞の兄の方舟の裁定を経て収まったという。

余（方苞）と二子（張自超・劉捷〔字は古塘。康熙五十年〔一七一〕辛卯科江南鄉試の解元〕）と居り、議論は則ち相い^{さから}抵い、文章は則ち相い駁す。往往にして詰難紛糾し、彼此 各々相い下らず。必ず先兄（方舟）一言を出して之を^{さだ}折め、乃ち各々其の意を得て争う無し（『望溪先生集外文』卷四・序・「張彝歎稿序」・二十葉）。

方苞が編纂を命ぜられた『欽定本朝四書文』には、張自超の「父爲子隱 二句」題の一首が収録されている。

また、張自超の二人の甥である劉毓嵩と邢紹中との連名の「春秋宗朱辨義序文」（雍正十二年陰曆十二月一日〔西曆一七三四年十二月二十四日〕記）によると、出仕の旅の途中の荏平で亡くなった時には、『春秋宗朱辨義』の稿本はみあたらず、後に家で副本を搜しだしたという。なお、刊記によると、『春秋宗朱辨義』は、乾隆五年（一七四〇）に出版されている。

奉^うけたる旨もて内に召さるるも、荏平（山東省東昌府荏平縣）に卒す。其の著述の行笥に在る者は盡く佚す。〔門人の孫〕喆と吾師の外甥の劉君楚亭（劉毓嵩）・邢君斯正（邢紹中）其の家の遺稿^{さが}を檢し、其の『[春秋宗朱]辨義』の副本を得て、藏^う弁（しまいこむ）して待つ有り。近年に及び遺腹の子の待育 年幼しと雖も、志 凡ならず。伯兄の〔張〕雲龍及び楚亭（劉毓嵩）・斯正（邢紹中）と正に因りて此の書を以て梓に授け、吾師の精英をして長く天地に留めしめんと欲す……（『春秋宗朱辨義』卷首・「劉毓嵩・邢紹中序」・一葉）。

唐鑑の『清儒學案小識』（道光二十五年〔一八四五〕孟夏〔陰曆四月〕序）の「高淳張先生」条（卷十二・經學學案）は、『四庫全書總目提要』の「春秋宗朱

辨義十二卷」条をほとんどそのまま引用する。

続いて、『春秋宗朱辨義』はどのような立場に基づいて著されたのかを、『春秋宗朱辨義』の序文を通じて検討してみよう。

（2）『春秋宗朱辨義』の綱領

徐家祺（字は少。安徽池州府青陽の人。康熙三十七年〔一六九八〕の選貢生）は、『春秋宗朱辨義』序文（乾隆五年陰曆十二月〔西曆一七四一年一月十七日～二月十五日〕記）において、張自超は『春秋』について議論されてきた一字褒貶（ある字を用いて、ある人物を褒貶する）を疑い、朱子の「據事直書」・「褒貶自見」の義を綱領とし、その説を敷衍したとする。

……六經 秦火の後より義理の指 紛紜錯雜に歸す。朱紫陽先生（朱子）を得て、大旨 曉然たり。顧だ朱子は『周易』・『毛詩』より外、『春秋』一經の如きは、亦た第だ其の槩を言うのみ。而れども此れより前の一字褒貶の説の以て比^{なら}べ例とす可からざるを疑う。是れ未だ『[周易] 本義』・『[詩] 集傳』の句疏字櫛の如からずと雖も、大體 已に悉く具われり。後の學者仍お一字の褒貶を執りて附會牽引して、其の安直を顧みず。聖人をして故に隱深曲異^{ことさら}の文を為すとし、彼に于いて・此れに于いて幾ど測る可からざらしむ。此れ徵君①（張自超） 疑い有る所以なり。而して前後を統べ彼此を合わし、義の相い通ずるを取り、以て扞格（食い違い）す可からざるなり。大意は據事直書・褒貶自見の旨⁽⁶⁾に本づきて以て綱領と為す。凡そ其れ勢^{はか}を揆り、時に準じ、情事（事実）に校し、諸儒の緒論（言論）を參酌

（6）『朱子語類』に、

『春秋』の書する所の某人 某事を爲すが如きは、本より魯史の舊文に據りて筆削して成る。今人の『春秋』を見るに、必ず某字もて某人を譏ると謂うを要す。此の如ければ、則ち是れ孔子 専ら私意に任せて、妄りに褒貶を爲す。孔子は但だ直書に據りて善惡自ずから著わす。今、若し必ず此の如く推し説くを要せば、須く是れ魯史の舊文を得て、筆削の異同を參校し、然る後に見る可しと爲し、而して亦た豈に復た得可けんや。譏（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

とある。

し、二千年未定の案に于いて、一朝に定む。或いは朱子 已に言う所に即して之を申べ、或いは朱子 未だ言わざる所に即して之を補い、又た或いは其の言の商す可き有るに于いては別に其の義を存す。徵君（張自超）をして朱子の門に遊ばしむれば、相い與に上下し、其の論 當に必ず起こすこと有るべし。予の嘆ずるに、將に此の書を以て『詩』・『易』に並べて傳えんとす……（『春秋宗朱辨義』 卷首・「徐家祺『春秋宗朱辨義』序」・二葉～四葉）。

①清・趙翼『陔餘叢考』（卷三十六「徵君徵士」条・二十二葉）に「學行有るの士の詔書を経して徵召さるるに仕えざる者を徵士と曰い、之を尊稱すれば則ち徵君と曰う」。

同じように、張自超の二人の甥である劉毓嵩と邢紹中との連名の序文にも、……大意は朱子の據事直書の旨に本づき、前後關通・彼此貫申し、隱深曲晦の説を爲さず。大義 自ずから明らかなること日照るが若く、達すること江流の若し……（『春秋宗朱辨義』 卷首・「劉毓嵩・邢紹中『春秋宗朱辨義』序」・一葉）。

と述べる。『春秋宗朱辨義』は朱子の「據事直書」にもとづいているとするのである。

張自超は、自序（康熙五十一年〔一七一二年〕陰曆五月記）において、『春秋宗朱辨義』とは、朱子を宗として諸儒の是非異同の説を考察し、『春秋』の義を明白にするものであるという。

『春秋宗朱辨義』は、紫陽朱子を宗として諸儒の是非異同の説を辨じ、以て『春秋』の義を發明するなり。或いは曰く、『春秋』一經は伊川（程頤）より簡要なるは莫く、文定（胡安國）より詳しく盡くすは莫し。朱子の説亦た畧なり。而して予 獨り之を宗とし以て諸儒の折衷を爲すは、何ぞや。曰く、解經の法の詳簡は論ぜざる所に在り、要は全經の大義の「觸る處皆な通ずる」（『四書或問』大學或問「曰自程子以格物爲窮理」条）に在るのみ（『春秋宗朱辨義』 卷首・自序・一葉）。

程頤や胡安國は、『春秋』の体例の前後異なることを指摘している。しかし、朱子が『春秋』の主旨として重視する「亂臣・賊子の誅伐、内地を重んじ外地を輕んず、王道を貴び伯（霸）功を賤しむ」の三つを理解すれば、『春秋』の大纲は求められるとする。また、朱子は、『春秋』にはもとより善を褒め惡を貶しめるという法則が示されているが、後にそれを強引に適用して、本来の意味を分からなくしてしまったといい、『春秋』は治亂興衰の事実を直ちに記しているだけで、一二字に毀譽褒貶はこめられていないともいっている。これらを理解すれば、『春秋』の体例は得られるとした。つまり、朱子の説は、簡略ではあるが、その理論にそって推測してゆけば、強いて体例を立てることもなく、前後が通じ、變例は正例に通ずるというのである。

伊川（程頤）曰く、『春秋』前に既に例を立て、後來に書し得て全く別あり」（『河南程子遺書』卷十七・伊川先生語三），と。文定（胡安國）曰く、『春秋』正例有り、變例有り。正例は聖人に非ざれば能く立つる莫し、變例は聖人に非ざれば能く裁つる莫し」（「明類例」），と。夫れ惟れ見る所 前後の互いに異なる有り、正・變の同じからざる有り。故に其の説を爲して此れに通じて彼に通ぜず、己が見に憑きて以て聖心を測り、經文を強いて我が説に就きて遷り、支離に就きて免るる能わざるなり。朱子は則ち曰く、『春秋』の主旨の其の見る可き者は、亂臣を誅し賊子を討ち、内を重んじ外を輕くし（『朱子語類』は「内中國、外夷狄」に作る）、王道を貴びて伯功を賤しむのみ」（『朱子語類』卷八十三・春秋），と。此れを識れば則ち『春秋』の綱領 得可きなり。又た曰く、「聖人『春秋』を作り、原より善を褒め惡を貶して、萬世不易の法を示す。今、乃ち此の説を用いて以て人を誅し、未だ幾くならずして又た此の説を用いて以て人を賞し、天下後世をして之を求め其の意を識ること莫からしむ。是れ後世の弄法舞文（法の条文を歪曲して不正を行なう）の吏の爲す所にして、聖人の至正の道に非ざるなり」（『朱子語類』卷八十三・春秋），と。又た曰く、『春秋』 直ちに當時の事を載す。其の治亂興衰を見^{あら}わしめ、一字・兩字に於いて褒貶を定めず」

（『朱子語類』卷八十三・春秋），と。此れを識れば則ち『春秋』の條目 以て悉く舉ぐ可きなり。蓋し朱子の説は，畧なりと雖も，其の説に因りて之を推せば，必ずしも強いて立てて例と爲さず①。後は前に通ず可く，變は正に通ず可し。又た何の前後の互いに異なり，正・變の同じからざらんや（『春秋宗朱辨義』卷首・自序・一葉～二葉）。

①『朱子語類』に「或る人 『春秋』を論じ，以爲らく多く變例⁽⁷⁾有るは，前後の書する所の法 多く同じからざる有る所以なり，と。曰く，此れ烏ぞ信ず可けん……。壯祖」（『朱子語類』卷八十三・春秋）。また，「『春秋傳』の例 多く信ず可からず。聖人 事を記すに，安くに許多の義例有らん……。徳明」（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

さらに，胡安國の議論の厳格さや義理の精密さは，後人の及ぶところではない。ただし事情にぴったりこないところや經の内容に関係しないところにおいての無理な議論は，理解できないし，朱子も非難しているとする。では，どのようにすればよいのかというと，朱子が程頤の『易傳』を理解した方法で行なえばよいとするのである。

或いは曰く，文定（胡安國）の説 朱子多く之を引用す，と。曰く，文定（胡安國）の書 烏くんぞ廢す可けんや。其の議論の嚴正・義理の精實は，皆な後儒の及ぶ能わざる所なり。特に其の事情に切ならず・經旨に關する無きものもて，之を析して煩瑣（煩瑣）にして之を合わせば窒礙（不明瞭）なる者は，解（解の俗字）する能わず。朱子に於いて義理を以て穿鑿するの譏りあるのみ①。義理（道理）を以て穿鑿する者は，明らかに其の説の以て通ず可からざるもて曲げて之を通ずと爲し，卒に以て通ず可からざる

（7）杜預は，「春秋左氏傳序」で『左氏傳』の義例を「凡例」・「變例」・「非例」の三つに区分した。杜預によると「變例」とは，

諸もろの「書」・「不書」・「先書」・「故書」・「不言」・「不稱」・「書曰」と稱するの類は，皆な新舊を起こして大義を發する所以なり。之を「變例」と謂う。然れども亦た史の書せざる所にして，即ち以て義と爲す者有り。此れ蓋し『春秋』の新意なり。故に傳「凡」と言わず，曲^{つまづ}らかにして之を暢ぶるなり。

というものである。

を知る。伊川（程頤）の『易傳』は、朱子^ぜ以て自ずから是と爲す。程氏の『易』其の本義を作れば、則ち務めて以て其の「包含該貫・曲暢旁通の妙」（『晦庵集』卷三十三「答呂伯恭」）を盡し、而して伊川（程頤）の象を説くに於いては義を取り之を推す。以て通ず可からざる者は、皆な取る所無し。然らば則ち『春秋』を學ぶ者は、朱子の『易』を解するの法に本づきて以て之を解せば、則ち大義 皆な通じ、聖人の心の所爲ゆる「炳なること日星が若き」②者にして、諸儒の隱深曲^{ごまか}異の説に晦すに至らず。康熙五十有一年（一七一二）、歳は壬辰、仲夏月（五月）に在り。高淳の張自超書す。（『春秋宗朱辨義』卷首・自序・一葉～二葉）。

①『朱子語類』に「胡文定 春秋を説くに、高くして事情を曉らず……。淳」（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

②『晦庵集』卷八十三・「書伊川先生帖後」に「春秋の大義數十 炳なること日星が若し」。

以上検討してきたように、張自超は朱子の『春秋』解釈を、「據事直書」・「褒貶自見」の観点から理解しようとしていたといえるのではないか。

では、張自超は朱子のこうした立場から、具体的にどのような解釈を行なったのであろうか。

（3）「衛人立晉」解

ここでは、さきに引用した『四庫全書總目提要』において、

「衛人立晉」の一條は尤も『春秋』の深意を得るが如し（『四庫全書總目提要』卷二十九・經部二十九・春秋類四・「春秋宗朱辨義十二卷」条）。

とされた、隱公四年「衛人立晉」の条目を検討してみたい。最も「據事直書」・「褒貶自見」の立場による解釈が明らかであると考えられるからである。

「衛人立晉（衛人 晉を立つ）」前後の事情は、次のようなものである。衛の桓公の二年（魯・隱公四年）に、衛の庶出の州吁が兄の桓公を弑して立った。それに衛の人たちが反対し、州吁を殺し（魯・隱公四年九月）、桓公の弟の晉を

邢（姫姓の小国）から迎えて宣公として即位させた（魯・隱公四年十二月）。

この「衛人立晉」について『春秋』はどのように評価したのか、論点となる。『春秋公羊傳』・『春秋穀梁傳』・『河南程氏經說』・『春秋胡氏傳』ではそれぞれ次のように述べ、孔子は「衛人立晉」を非難していると考える。

『春秋公羊傳』：「〔隱公四年〕冬十有二月，衛人立晉」の傳に「「晉」とは何ぞ，公子晉なり。「立」とは何ぞ。「立」とは宜しく立つべからざるなり。其の「人」と稱するは何ぞ。衆 之を立つるの辭なり。然らば則ち孰れが之を立つ。石碯 之を立つ。石碯 之を立つ，則ち其の「人」と稱するは何ぞ。衆の立てんと欲する所なればなり。衆 之を立てんと欲すと雖も，其の之を立つるは非なり」。

『春秋穀梁傳』：「〔隱公四年〕冬十有二月，衛人立晉」の傳に「衛人とは，衆きの辭なり。「立」とは宜しく立つべからざる者なり。「晉」の名いうは惡めばなり。其の「人」と稱して以て之を立つは，何ぞや。衆を得ればなり。衆を得れば則ち是れ賢なり，賢なれば則ち其の「宜しく立つべからず」と曰うは，何ぞや。春秋の義，諸侯〔の繼嗣〕 正に與し，賢に與せざればなり」。

『河南程氏經說』：卷四・伊川先生・春秋傳「〔隱公四年〕冬十有二月，衛人立晉」条に「衛人 公子晉を邢より逆えて之を立つ。書して「衛人立晉」と曰うは，衛人 之を立つればなり。諸侯の立つは，必ず命を天子に受く。當時 命を天子に受けずと雖も，猶お命を先君に受くるがごとし。衛人晉の公子を以てするや，以て立つ可しとし，故に之を立つ〔しかし，これは〕，『春秋』の與せざる所なり。先君の子孫と雖も，天子・先君の命に由らざれば，立つ可からざるなり，故に其の「公子」を去る」。

『春秋胡氏傳』：「〔隱公四年〕冬十有二月，衛人立晉」条に「人とは，衆きの詞なり。「立」とは宜しく立つべからざるなり。晉 諸侯の子と雖も，内に國を先君に承けず，上は命を天子に稟けず。衆とは宜しく立ちて遂に自立すべきを謂う。可なるか。故に『春秋』 衛人に於いては特に書して

「立」と曰い、擅に其の君を置くの罪を著わす所以なり。晉に於いては其の「公子」を絶ち、其の國を專有するの非を明らかにする所以なり。此れを以て法を垂れ、而して父子・君臣の義 明らかなり。未だ子と爲りて而して之を父に受けざること有らざるなり、未だ諸侯と爲りて而して之を王に受けざること有らざるなり」。

なお、『春秋左氏傳』は、

〔傳〕〔隱公四年〕冬十二月、宣公 位に即く。書して「衛人 晉を立つ」と曰うは、衆ければなり。

とし、晉・杜預（二二二年～二八四年）は、經の「〔隱公四年〕冬十有二月、衛人立晉」に注して、「其の衆を得るを善とす」として評価している。

衛人 公子晉を逆^{むか}えて之を立つ。其の衆を得るを善とす。故に「衛に入る」と書せず、文を變じて以て義を示すなり。例は成〔公〕十八年に在り①。

①『春秋左氏傳』成公十八年・經の「宋魚石復入于彭城」条の杜預注に「傳例曰、以惡入」。

さて、張自超は、君主が弑され、その弑した賊を討ち、跡継ぎを立て、弑された先君を葬るという一連の流れをすべて記述してあるのは、『春秋』でもこの箇所のみであると述べる。また、『春秋』では、魯以外は、弑君を継いだのと、弑君を継いだのではなく普通に即位したものは、記述しないことになっている。そこからすると、ここですべてが記述してあるということは、弑君の變があった時には、必ず賊を討ち、跡継ぎを立て、弑された先君を葬るということを行なわねばならないことを聖人が示したと考えるべきである。晉の即位と衛人が晉を立てたことは、それほど深く問題にしていない。また、賊を討ったうえで、君主を立てたのは、衛と齊である。ただし齊の場合は、國を争って糾を殺しているのです、「立」と書いていないという。

弑に遇いて賊を討ち、君を立て、以て先公を葬るは、『春秋』一經に僅かに衛の事に見ゆ。故に『春秋』を通じて、外の君の故（弑）を繼ぐ①と故（弑）を繼ぐに非ずして立つ者とは皆な書せず。獨り弑君を繼ぎて、「衛人

立晉」と書すること有る者は、當に是れ聖人 衛の事を以て後人に示すに、弑君の變有るに遇う者は、當に衛の賊を討ち、君を立て、以て先公を葬るが如くすべしと。而して晉の立つと衛人の晉を立つとは、未だ深く責めること有らざるなり。〔魯・桓公二年に〕宋の殤 弑され馮（莊公） 立ち、〔魯・莊公十二年に〕宋の閔 弑され御説（桓公） 立ち、〔魯・宣公二年に〕晉の靈 弑され黒臀（成公） 立ち、〔魯・成公十八年に〕晉の厲 弑され周（悼公） 立つに、『春秋』の「立」と書せざる者は、賊の未だ討たざればなり。賊を討ちて君を立ては、惟だ衛と齊とのみ。而して〔齊の〕小白は「入」と書し②、「立」と書せざる者は、小白 國を争いて糾を殺す③の罪有ればなり。然らば則ち衛人に於いて何をか責めんや、晉に於いて何をか責めんや。（『春秋宗朱辨義』卷一・「〔隱公四年〕冬十有二月衛人立晉」条・二十二葉）。

①繼故：『穀梁傳』桓公元年「正月，公即位」の傳に「故を繼げば即位と言わざるは、正なり」、范甯の集解に「故とは、弑さるるを謂う」。

②魯・莊公九年に「齊小白入于齊」。

③魯・莊公九年に「九月，齊人取子糾殺之」。

『公羊傳』・『穀梁傳』ともに、「立とは、宜しく立つべからざるなり」といって非難する。しかし、その理由は説明しない。ただ『穀梁傳』は、その立ったのが「正」ではないからだとするが、衛の桓公の十六年の在位中の嫡・庶のことははっきりしないので、その正・不正を判断する基準がない。

公〔羊傳〕・穀〔梁傳〕 皆な「立者，不宜立也」（隱公四年）と言う。而して宜しく立つべからざる所以の故を言わず。穀梁〔傳〕は則ち以爲らく君を立ては正を以てし、賢を以てせず、と①。夫れ衛の桓 位に在ること十六年の世に適の有無存亡は攸うる可からず。又た何に憑きて晉の不正を斷ぜんや。（『春秋宗朱辨義』卷一・「〔隱公四年〕冬十有二月衛人立晉」条・二十二葉）。

①『穀梁傳』隱公四年「冬十有二月，衛人立晉」条に「春秋之義，諸侯

與正而不與賢也」。

程頤は、天子と先君に命を受けていないから非難されるのだとする。すると魯以外の国で弑君を継いで「立」と書く・書かないと、魯の「即位」と書く・書かないとは同じ意味になる。「衛人」が特に晉を「立」てたと書いてあるのは、君主の罪を置くためであり、晉に「公子」とつけていないのは、勝手に君主となったことを非難しているからだ、と胡安國がいうのは一応の脈絡は通っている。しかし、程頤の考えと合わせてみると、晉の「立」は、魯の桓公・宣公の「即位」と同じなのであろうか、もしくは魯の莊公・閔公・僖公の「即位」と同じなのであろうか。もし魯の桓公・宣公の「即位」と同じであれば、弑君にかかわったことになる。しかし晉についてはそんなことは伝わっていない。もし魯の莊公・閔公・僖公の「即位」と同じであれば、先君の意にそぐわずに君主になったことになる。しかし、晉はそうではない。この二つの観点からも、非難できないとすると、晉や衛人をどのように罰すればよいのであろうか。

伊川（程頤） 以爲らく命を天子に請わず、命を先君に受けず、と①。此れに據れば則ち外の君の故（弑）を繼ぐ③の「立」と書す・「立」と書せざると内の君の「即位」と書す・「即位」と書せざるとは義を同じくす。文定（胡安國） 以爲らく「衛人に於いて特に書して「立」と曰うは、擅に其の君を置くの罪を著わす所以なり。晉に於いて其れ「公子」〔と称するの〕を絶つは、専ら其の國を有つ^{たも}の非を明らかにする所以なり」（『春秋胡傳』隱公四年「冬十有二月衛人立晉」条），と②。其の義 亦た猶お^ぜ是なるがごとし。然らば則ち晉の「立」と書するは〔魯の〕桓・宣の「即位」と書すと同じきや、〔魯の〕莊・閔・僖の「即位」と書せざると同じきや。如し〔魯の〕桓・宣の「即位」と書すと同じければ則ち諸儒 〔魯の〕桓・宣を以て故（弑）に與かり聞く③と爲す、而して晉 未だ聞く有らざるなり。如し〔魯の〕莊・閔・僖の「即位」と書せざると同じければ則ち諸儒 〔魯の〕莊・閔・僖を以て先君の心を隱すること有り^と爲す、而して晉 亦た宜しく有るべきなり。故（弑）に與かり聞きて罪無し、先君の心を隱すること

有りて亦た罪無し。然らば則ち何の罪を以て晉を罪せんや。何の罪を以て衛人を罪せんや（『春秋宗朱辨義』巻一・「〔隱公四年〕冬十有二月衛人立晉」条・二十二葉～二十三葉）。

①『河南程氏經說』巻四・伊川先生・春秋傳「冬十有二月，衛人立晉」条に「諸侯之立，必受命於天子，當時雖不受命於天子，猶受命於先君。衛人以晉公子也，可以立，故立之，『春秋』所不與也。雖先君子孫，不由天子先君之命，不可立也，故去其公子」。

②『春秋胡傳』「〔隱公四年〕冬十有二月衛人立晉」条に「人，衆詞。立者，不宜立也。晉雖諸侯之子，内不承國於先君，上不稟命於天子，衆謂宜立而遂自立焉。可乎。故『春秋』於衛人特書曰立，所以著擅置其君之罪，於晉絕其公子，所以明專有其國之非，以此垂法，而父子君臣之義明矣。未有爲子而不受之父也，未有爲諸侯而不受之王也」。

③『穀梁傳』桓公元年「正月，公即位」の傳に「繼故而言即位，則是與聞乎弑也」。

また、これまでの儒者も晉に非難すべき罪がみつからないので、程頤のいうように晉が命を先君と天子に請わなかったことを非難する。そうであれば、衛人が晉を立てたことを非難すべきである。おそらく孔子はこのような厳格な気持ちで『春秋』を作ったのではない。「衛人」というのは、晉を迎え入れるのが衛国の公論であったからである。また、「晉」と書き「公子晉」としていないのは、晉が衛国にいた時は、公子として処遇されていなかったためである。宋・家鉉翁は、『春秋詳説』で晉に公子がつけられていないのは、後の不行跡のためだとするが、齊の桓公（小白）のことから考えても納得できない。

諸儒^{つまび} 曲らかに之が説を爲して〔次のように〕曰う。宋の馮（莊公）・宋の御説（桓公）・晉の黑臀（成公）・晉周（悼公）の「立」と書せざるは、彼れ賊の討たず・君の塋らずの罪有り、故に其の擅に立つは、以て責むるに足らず。〔魯・莊公九年〕齊の小白（桓公） 入るを争いて糾を殺すの罪有り、故に其の擅に立つは、以て責むるに足らず。惟だ晉に〔こうした〕諸人の

罪無し、故に其の未だ命を先君に受けず、又た命を天子に請わざるを罪するなり。是の若ければ則ち命を受く・命を請うの義は獨り衛人 晉を立つに於いて之を發し、其の然らざるを責む。夫れ夫子の『春秋』を作るは、法を用いて平らにして心を宅^おきて恕なり。恐らく此の若く其の苛ならず①。故に『春秋』の「衛人」と書する者は、衛人の公を著わし、尹氏の私が若きに非ずを知るなり。「衛人立晉」と書する者は、晉の衛人の立つる所なるを著わし、[昭公二十三年にある王子] 朝は尹氏の私が若きに非ざるなり②。「公子」と書せざる者は、晉の國に在るの時、原より未だ公子の命を受けず・公子の事を行なわざればなり。家氏（宋・家鉉翁。号は則堂） 又た以爲らく「衛の晉 國を得て驕なり、晩に獸行を爲す。『春秋』 其の始め「立」に於いて「公子」を去り以て衛の亂るるの從り起こる所を見す」（『春秋詳説』卷二・「冬十有二月衛人立晉」条）、と。然らば則ち齊の桓 國を得て、諸侯を九合し、一たび天下を匡す。『春秋』 何を以て其の齊に入るの時に於いて「公子小白」と書し③以て齊の伯（霸）の由り興る所を見さざるか。未だ不善を爲すを見ずして先に貶め、未だ善有るを見ずして先に褒^{あらわ}むるは、義に於いて之れ無し（『春秋宗朱辨義』卷一・「[隱公四年] 冬十有二月衛人立晉」条・二十三葉）。

①『春秋胡氏傳』卷十五・「[文公九年] 冬，楚子使椒來聘」条に「夫春秋立法謹嚴，而宅心忠恕。嚴於立法，故僭號稱王，則深貶黜」。

②『春秋』昭公二十三年・經に「尹氏立王子朝」。明・劉基の『誠意伯文集』卷十三「衛人立晉」条に「或曰、『春秋』書立君者二。此年衛人立晉及昭二十三年尹氏立王子朝是矣。彼則指其立之之人，而此則言衛人，何也。蓋立子朝者尹氏之私意也。朝不當立而獨尹氏立之也。晉雖不當專有其國，而實當立。故衛人之立晉，特不請于王，爲可罪，而非若尹氏之私于子朝也。此又輕重之權衡也。吁，聖人之筆嚴矣哉」。

③魯・莊公九年・經に「齊小白入于齊」。

このように、張自超は、これまでのいろいろな角度からの非難は、適切でない

とする。『春秋』はここで、聖人が弑君の變があった時には、必ず賊を討ち、跡継ぎを立て、弑された先君を葬るということを行なうべきであることを示しているだけである。つまり、「據事直書」し、その結果として「褒貶自見」するようになっているというのである。

張自超の『春秋』解釈は、こうした朱子の「據事直書」・「褒貶自見」に基づくものである。張自超は、それを「總論」で二十条に分けて解説を行なっている。そこで、続けて張自超は、朱子の『春秋』理解をどのようにまとめているのかを『春秋宗朱辨義』の「総論」を通して考えてみたい。

(つづく)